ja

キリストの御国による平和

「天の下のすべての王国の主権と力と偉大さは、いと高き方の聖なる民に与えられる。その王国は永遠に続き、すべての支配者は彼に仕え、彼に従う。」
ダニエル書 7:27

歴史のページは戦争の血で染まっている。国家間の争いは、ほぼ例外なく戦場において決着がついてきた。先見者や賢者たちは、この冷酷で無意味な慣行が終焉を迎え、地上の民が互いに共存するための健全かつ正義にかなった方法を採用する日が来ることを予見していた。
聖書の預言者たちは、神の聖霊の導きを受けて、そのような時が来ることを予告した。彼らは、世界政府、すなわち支配体制が樹立されることによってそれが実現すると説明した。その政府は、すべての国の民に公正で正しい法律を強制的に課し、その遵守を通じて、普遍的かつ永続的な平和が保証されるのである。

世界政府の下で訪れるこの平和の時代に関する聖書の預言において、約束の王国は文字通りの強力な政府であり、預言の中で割り当てられたあらゆる機能を遂行するために完璧に組織され、強力な装備を備えているため、神の計画が失敗することはないと保

証されています。それはキリストの王国であり、聖書が明らかにしているように、キリストの王国は真の政府です。
この王国、そしてその最高統治者であるキリストについて、預言者は次のように予告しました。「その支配と平和は増し加わり、終わりがない。」イザヤ書9章6、7節

キリストの王国となるべき来るべき世界政府は、聖書の主要なテーマの一つである。旧約聖書の預言者たちは、この神の力に支えられた統治を熱烈に予言し、描写した。
これに関する最初の言及の一つは、死の床にあったヤコブによるもので、彼は次のように預言しました。「ユダは獅子の子である。わが子よ、あなたは獲物から立ち上がった。彼は身をかがめ、獅子のように、また老いた獅子のようにうずくまった。誰が彼を起こすことができようか。
「シロが来るまで、ユアから王権の杖は離れることなく、その足の間から統治者は現れる。そして、諸国民は彼のもとに集まるであろう。」創世記49:9,10

この預言は、ヤコブとその家族がエジプトにいた時に語られた。当時のエジプトにおいて、身をかがめた獅子は、統治の象徴であり、支配する権利の象徴であった。
したがって、ユダを「うずくまる獅子」として描いたこの預言は、イスラエルのこの王族から、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神が約束された「

子孫」、すなわちメシアであり王となる方が現れることを、象徴的に表したものでした。ヤコブはこの来るべき王なる方に対し、預言的に「シロ（Shiloh）」という称号を与えました。これは「平和な方」を意味します。
「民の集まり」がシロに向かうという彼の預言は、単に、エホバによって遣わされるこの統治者が、「平和の君」として諸国に平和をもたらすことを意味していたのです。

イザヤはこの偉大な王の誕生と、最終的に統治者としての高められることを予言し、次のように述べました。「ひとりの子が我らのために生まれた。ひとりの子が我らに与えられた。その肩に統治の重荷がのしかかる。その名は『驚くべき者、助言者、全能の神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」（イザヤ9:6）。その後、イザヤはこの来るべき地の支配者をエホバの「御腕」と呼び、この「聖なる御腕」がすべての国々の目の前で現され、「地の果て」のすべてが「神の救い」を見ることを預言した。イザヤ52:10

メシアの王国の普遍性について、ダビデは次のように記しています。「地の果てのすべての人々が主を覚え、主に立ち返る。諸国のすべての氏族があなたの御前で礼拝する。王権は主（エホバ）のものであり、主は諸国の統治者だからである。」（詩篇22:27, 28）。
ダビデはまた、エホバの王国について次のように記

しています。「主よ、あなたのすべての御業はあなたを賛美し、あなたの聖徒たちはあなたを祝福します。彼らはあなたの王国の栄光を語り、あなたの力を語り、人の子らに、その力強い御業と、その王国の栄光ある威厳とを知らせるためです。あなたの王国は永遠の王国であり、あなたの支配はすべての世代にわたって続くのです。」（詩篇145:10-13）

ダニエルは、第一次世界大戦前にヨーロッパで権力を握っていた、旧ローマ帝国の各地域を統治する支配者たちに関する預言の中で、次のように記しています。「これらの王たちの時代に、天の神は一つの王国を立てられる。それは決して滅びることのない王国であり、他の
人々に引き継がれることもない。むしろ、それはすべての王国を打ち砕き、滅ぼし尽くし、永遠に存続するであろう。」ダニエル書 2章44節

新約聖書において

私たちは、神の定められた時に世界統治を行う王国、すなわち政府に関する旧約聖書に記録された数多くの約束のうち、ほんの一部を引用したに過ぎない。新約聖書もまた、この心強い王国のテーマを引き継いでいる。イエスの誕生を告げた天使は、羊飼いたちにこう言った。「恐れることはない……今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方は主キリストである。」
すると突然、天の軍勢の群れが、「いと高きところには神に栄光、地には平和、人々に善意があるよう

に」と歌った。（ルカ2:10,11,14）。また天使は、約束されたメシアであるキリストの誕生を告げるこの知らせが、最終的には「すべての民」に届く良い知らせであると語った。

新約聖書におけるメシア、王、そして彼によって築かれる王国への言及は、単に預言という性質のものではありません。それらは、旧約聖書の予言の成就が始まったことを示しているからです。例えば、旧約聖書は王が来ることを予告していましたが、天使は羊飼いたちに、今やその王が生まれたと告げたのです。神の約束の成就として、人に対する神の善意が初めて示されたこの出来事は、今や現実のものとなったのです。

預言者たちの最後を飾る洗礼者ヨハネもまた、成就した預言について語った。「悔い改めよ。天の御国が近づいたからである」（マタイ3:2）。預言者ダニエルは、天の神が御国を築かれると預言していた。御国には王がいなければならない。そして今、天の神が約束された王の威光が、イエス・キリストという御姿で現れたのである。

イエスは、「悔い改めよ。天の御国が近づいたからである」と宣べ伝えました。
（マタイ4:17）。この箇所のより直訳的な訳は、洗礼者ヨハネが告げた通り、天の神が約束された王国の王が来られ、すでに「近づいている」、すなわちイスラエルの民のただ中にいることを示唆している。イエスが弟子たちを宣教に遣わされた際、彼らへ

の使命は、「行きの途上で、『天の御国は近づいた』と宣べ伝えなさい」というものだった。（マタイ10:7）

イスラエルの民は、神の御国に関する約束を知っていた。これは特に、国の宗教的指導者たち、すなわちパリサイ人らに当てはまる。彼らは、多くの人がイエスを、この御国で統治する約束された王だと見なしていることを知っており、イエスに「神の国はいつ来るのか」と問いただした。
イエスは答えて言われた。「神の国は、目に見える形（傍注には『外見上の見せかけ』とある）で来るものではない。また、『見よ、ここにある』とか、『見よ、あそこにある』と言うこともない。なぜなら、見よ、神の国はあなたがたのうち（傍注には『あなたがたの間』）にあるからだ。」ルカ17:20,21

パリサイ人たちは、イエスがメシアの王国を築くためにイスラエルの神によってこの世に遣わされたという信仰を、ほとんど、あるいは全く持っていなかった。彼らは、ローマ帝国を征服し、イスラエルの民をカエサルの支配から解放できるような大軍を率いなければ、このような大業を成し遂げる者など想像できなかったのだ。
イエスは彼らの心の中を読み取られた。それゆえ、ご自身が王となる「
（神の国）」は、そのような形で樹立されるものではないと説明された。イエスは言われた。それは、世が征服者の支配者によって示されるのを見慣れて

いるような、外見上の華やかさや栄光をもって来るものではない、と。

ファリサイ派の人々が、イエスがエホバの約束された王であることを疑っていることを知っていたイエスは、ギリシャ語原文の適切な訳に従えば、天の王の威光が彼らの間にあり、もちろんそれは自分自身を指しているのだと、さらに説明した。これは、偽善的な宗教指導者たちに対して投げかけるには大胆な主張だったが、彼らにとっては良い証しとなった。もっとも、それを信じた者は、いたとしてもごくわずかだった。

この箇所の不適切な翻訳が、天の王国が一体何であるかについて多大な混乱を招いてきた。ある翻訳では、「天の王国はあなたがたの中にある」と記されている。
地上に文字通りの世界的な政府を樹立し、人類に平和と喜びをもたらすという神の約束を信じない人々は、この誤訳された箇所を根拠に、神の王国に関する聖書の証言は、単に、山上の説教などに含まれるイエスの道徳的・倫理的教えの影響に従う個人が獲得する、健全で敬虔な心と精神の状態を指すに過ぎないと証明しようと試みてきた。
彼らは、キリストの王国が「拡大する」という預言は、このようにキリストに身を委ね、その戒めに従おうとする人々の数が増えることで表されていると主張する。

しかし、問題の「
」という発言が、イエスが度々「偽善者」「白く塗られた墓」「悪魔の子ら」と呼んだファリサイ派の人々に対してなされたものであるという事実を考慮すれば、この見解の矛盾はすぐに明らかになる。どうして神の王国が、そのような人々の心の中にあると言えるだろうか。
しかし、すでに指摘したように、イエスが実際に語ったのは、天の神が約束された預言された王国の王が、ファリサイ派の人々の間にいるということであったと理解すれば、その考えは明確になり、この主題に関する聖書の一般的な証言とも調和する。

堕落し不完全な、私たちの有限な心にとって、創造主が人間という被造物のために具体的な何かをなされるという考えを信じることは、一見困難なように思われる。
神の民を自称する者たちのこの信仰の欠如は、あらゆる時代を通じて現れてきた。彼らは、神の約束が人間の努力によって成就されるものだと想像してきた。つまり、その約束とは、単に神が、御自分の人間の僕たちが正しいと捉え、熱意をもって成し遂げようと努めたことに、承認の印を押してくださるに過ぎない、と。

イエスが敵によって処刑され、たとえ復活されたとはいえ、目に見える文字通りの王国が彼によって確立されたという証拠もなく何世紀も過ぎ去ったため、聖書の王国に関する約束とは、単にイエスの信徒

たちが成し遂げ得ることを指しているに過ぎないと結論づけるのは、容易かつ自然なことであった。
この信仰と理解の欠如ゆえに、歪んだ考えが生まれていった。名ばかりのキリスト教徒の大多数は、やがて世俗の政府と結託し、その不聖なる結合を「キリスト教世界（
）」、すなわちキリストの王国と呼んだ。また、特にこの時代の末期において、数百万の人々が、前述のように、キリストの王国とは単にキリスト教信者の心の中にある義なる影響力、あるいは聖なる衝動に過ぎないという考えに飛びついた。

この世のものではない

イエスが敵によってピラトの前に引き出された際、彼らがイエスに対して突きつけた告発は、彼が王であると主張したというものだった。もしそのような主張が真実であれば、彼はローマ帝国に対する反逆罪に問われることになる。
イエスは、王となるためにこの世に来られたことを認めつつも、次のように説明された。「わたしの王国はこの世（ギリシャ語で『コスモス』、社会秩序）のものではない。もしわたしの王国がこの世のものであったなら、わたしのしもべたちは、わたしがユダヤ人たちの手に渡らないように戦うはずだった。しかし、今、わたしの王国はこの世から来たものではない。」ヨハネ18:36,37

イエスが「わたしの王国はこの世のものではない。もしそうであったなら、わたしのしもべたちは戦っ

たであろう」と述べたことは、キリストの名の下に推進・実行され、その王国の利益を促進することを目的としていると主張するあらゆる軍事作戦に対して、神による断罪を下すものである。イエスが示したこの行動原則によれば、何世紀にもわたるいわゆる「聖戦」は、まったく聖なるものではなく、不聖なるものであり、神によって認められたものではない。

さらに、イエスの「私の王国はこの世のものではない」という説明は、「キリスト教世界（Christendom）」と呼ばれる、キリストの王国を意味する人間の文明概念が、誤った名称であり、実際には真のキリストの王国の偽物であったことを意味している。
したがって、聖書の王国の約束を、より良い世界を築こうとする人間の狡猾な試みのどれか一つに巧妙に適用してきたあらゆる哲学は、神の約束の成就に向けた神の計画と調和せず、それに反するものであった。

誠実で敬虔な聖書研究者が、こうした人間の哲学にふけったり、それに惑わされたりすべき正当な理由は何一つなかった。なぜなら、イエスは、現世において自分の王国が樹立されることを誰も期待すべきではないと明らかにしていたからである。イエスがピラトに、自分の王国はこの世のものではないと告げるわずか数日前に、イエスは弟子たちに、同じ重要な真理を教えるためにあるたとえ話を語った。
そのたとえ話は、ある貴族（イエスを象徴する）が

、王国を受け継いで戻ってくるために遠い国へ旅立ったというものでした。このたとえ話の冒頭では、弟子たちがイエスの王国がすぐに現れるものだと考えていたため、イエスがこの話を語ったと説明されています。ルカ19:11,12

弟子たちの希望

イエスの弟子たちは、イエスが旧約聖書の預言者たちによって予告されたメシア、すなわち偉大な王であることを心から信じていました。彼らは、イエスが約束されたその王国、すなわちその影響力を全地球に広げ、全人類に平和と幸福をもたらす「統治」を確立するために来られたと信じていました。この信念において、彼らは正しかったのです。
しかし、彼らはイエスがこの素晴らしく力強い統治を直ちに打ち立てるだろうと期待していた。
これについては、彼らは間違っていた。それは「ある貴族」のたとえ話が明らかにしている。

イエスの弟子たちによるこの誤った見方は、十分に許されるものでした。なぜなら、イエスは彼らに、御自身の王国において自分たちが目立つ役割を担うと信じさせていたからです。そして、神の計画に対する彼らの限られた理解において、それはキリストの王国が必然的に彼らの存命中に樹立されなければならないことを意味していたのです。
さもなければ、と彼らは考えた、どうしてイエスと共に王国の統治に参与できると期待できようか。また、イエスの「恐れるな、小さな群れよ。あなたが

たに王国を与えることは、あなたがたの父の喜びだからである」という約束が、どうして成就されようか。（ルカ12:32）

使徒たちは、イエスの王国の統治においてイエスと共にいるという見通しに深く心を砕き、そのことについて互いに多くの議論を交わした。特にヤコブとヨハネは、王国において優遇された地位を確保することに熱心で、母親にイエスに尋ねさせ、自分たちのうちの一人が王国の右の座に、もう一人が左の座に座ることができるかどうかを尋ねさせた。
イエスは、彼らが御国で自分と共にいることができない、あるいはそうならないとは言われませんでした。なぜなら、イエスは彼らに、そうなるだろうと信じる理由を与えていたからです。イエスはただ、自分と共にいるために彼らが払わなければならない高い代償に注意を向けさせたのです。イエスは尋ねられました。「わたしが飲む杯を飲むことができ、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか。」彼らの答えは、「できます」でした。
マタイによる福音書 20:20-22

イエスはヤコブとヨハネに答えて言われた。「あなたがたは、確かにわたしの飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることになる。しかし、わたしの右
と左に座ることは、わたしに与えることのできないことである。それは、わたしの父によって用意された人々に与えられるのである。」

（マタイによる福音書20:23）。このように、イエスはこの二人の愛する使徒たちに御国における特定の地位を約束することはなかったが、そのような任命を行う権限は自分にはないと説明しつつも、彼らがイエスの「杯」を飲み、イエスの「バプテスマ」を受けることによってその価値を証明すれば、御国の統治をイエスと共に分かち合うことになるという彼らの理解を、確かに認めたのである。

彼らは、これらの条件を満たす「能力」、すなわち意志があることを断言したが、当時、イエスの「杯」を飲み、その「バプテスマ」を受けることが何を意味するのかを、彼らが理解していたかどうかは疑わしい。
後に新約聖書で明らかにされたように、イエスは弟子たちに、自分と共に苦しみ、死ぬよう招いていたのである。もし彼らがこれを理解していたなら、死からよみがえるまでは、いかなる場合でもイエスの王国の栄光の中にいることはできないことを知っていたはずであり、そしてそれは、続く時代の終わりまで起こらないことを彼らは知っていたのである。ヨハネ11:24；マタイ13:39

イエスの「杯」とは、苦しみと死の杯であり、イエスはそれを忠実に、苦い底まで飲み干されました。イエスの「バプテスマ」とは死のバプテスマであり、バプテスマのヨハネによる水への浸礼は、その単なる象徴に過ぎませんでした。パウロはこう記しています。「あなたがたは知らないのですか。私たち

イエス・キリストにバプテスマを受けた者は皆、キリストの死にバプテスマを受けたのです」（ローマ6:3）。
聖書において、この時代のイエスの弟子たちが、死に至るまでの自己犠牲という彼の足跡に従うよう招かれているという事実ほど、明確に示されているものはない。この弟子としての条件と結びついているのは、
それらに忠実であることが証明された者たちが、彼の王国において彼と共に統治するという約束である。

パウロはこう記しています。「この言葉は真実です。もし私たちがキリストと共に死んだなら、キリストと共に生きるのです。もし私たちが苦難に耐えるなら、キリストと共に支配するのです。」（テモテへの手紙第二
2:11,12）。また、「もし私たちが子であるなら、相続人でもあります。神の相続人であり、キリストと共に相続人となるのです。ただし、私たちがキリストの栄光にあずかるために、キリストの苦難にあずかるのであれば、の話です。」（ローマ人への手紙8:17）。復活後、イエスはこう言われました。「克服者には、わたしも克服して、父の御座に着いているのと同じように、わたしの御座に着くことを許そう。」（黙示録3:21）。またイエスは、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」
（黙示録2:10）。そして、これらの忠実な者たちに

対する素晴らしい約束として、「最初の復活」において死からよみがえり、「キリストと共に千年間生き、支配する」ことが挙げられる。黙示録20:4,6

御霊によって生まれる

ヨハネによる福音書3章1節から13節には、イスラエルの指導者であったニコデモが、イエスの教えについてさらに学ぶために夜、イエスを訪ねたことが記されています。
イエスはニコデモに、神の国に入るためには、新たに生まれなければならないと説明されました。これはニコデモには非常に奇妙に思え、どうすればそうなるのかと尋ねました。イエスが言及されたのは、肉による誕生ではなく、御霊による誕生でした。イエスはこのイスラエルの指導者に、御霊から生まれた者は風のようなものである、つまり、力強いが、目には見えないものであると説明されました。

もちろん、ニコデモはイエスの意図を完全には理解できませんでしたが、その後のイエスと使徒たちの教え（
）に照らして、今や私たちは、イエスと共に王国の統治を担う者たちは、まずイエスがそうであったように、性質の変化を経験しなければならないことをはっきりと理解できます。イエスは、世の命のために、ご自身の肉体、すなわち人間性を捧げられました。
（ヨハネ6:51）。この人間としての命の犠牲こそが、人類の世界に贖いをもたらし、キリストの王国の

時代において、すべての人に命を取り戻す機会を保証するものである。（ヘブル2:9；テモテへの手紙第一2:3-6）。
そして、肉において死に渡されたイエスは、栄光に満ちた神聖な存在として死からよみがえり、天と地におけるすべての権威を授けられました。（ヘブル人への手紙1:1-4；マタイによる福音書28:18）

イエスと共に苦しみ、死に、復活においてイエスと共に生き、支配するために高められる者たちは、人間的な性質から神聖な性質への変容も経験することになる。ペテロは、「私たちには、極めて大きく尊い約束が与えられている」と記し、「これらによって、私たちは神の性質にあずかる者となる」と述べた。（ペテロの手紙第二1:4）。またペテロは、クリスチャンについて、天の父が「イエス・キリストの死からの復活によって、私たちを生き生きとした希望へと新たに生み出し、朽ちることなく、汚れなく、衰えることのない、天にあなたがた（注：私たち）のために留め置かれている御国を受け継ぐ者とする」と記しています。ペテロの手紙第一 1:3,4

このような約束は、誤解されることで、イエス・キリストによって救われた者は皆、永遠に天国で過ごすという誤った信念につながってきました。しかし、これは全くの誤解です。これらの天の約束は、イエスの足跡をたどる者たち、すなわち、自分を捨て、十字架を背負い、

彼に従って犠牲的な死へと向かう者たちへのみ向けられたものです。
（マタイ16:24）。彼らがこのように犠牲を払うよう招かれているのは、救いを得るためではなく、約束されたその栄光の王国——すなわち、地上の平和を確立し、その義の律法に従うすべての人々に健康と喜びと永遠の命を与える王国——において、キリストと共に生き、支配するにふさわしい者であることを証明するためである。

この天の栄光への高揚こそが、イエスが「御霊から生まれる」と語った意味である。（ヨハネ3:5,6）。主の真の従者たちは皆、この現世においてこの天の希望へと生み出されているが、御霊による誕生が実際に起こるのは復活の時である。これは、御霊から生まれた者たちは、風のように人の目には見えないが力強い存在であるという、イエスの説明と一致している。
イエスと共に、この世から召され、現在の時代に忠実であることを証明したこの人々は、メシアの王国の霊的な段階を構成することになる。麦と毒麦のたとえ話の中で、イエスは彼らを「王国の子供たち」と呼び、彼らが「父の王国において太陽のように輝き出る」と説明している。（マタイ13:25-30,36-43）

王国の「鍵」

イエスの足跡に従い、それによって御国における共同相続人となる資格を得るという招きは、福音——イエスによる贖いの良き知らせ、そして御国の働き

手たちを通じて人々に届く命の機会——を通して示されている。
イエスは、自己を否定することによってのみ、人はその弟子となることができると説明されました（マタイ16:24）。しかし、犠牲を伴うその狭い道が実際に開かれたのは、イエスの死と復活の後であるペンテコステの時でした。

イエスはペテロに、天の御国の「鍵」を与えると約束しておられました。それゆえ、ペンテコステの日に福音を宣べ伝え、御国への扉を正式に開いたのはペテロでした。
（マタイ16:19）。これはユダヤ人信徒たちのために行われたことでした。その後、異邦人に対して初めて御国の福音を宣べ伝えたのもペテロでした。それは、最初の異邦人改宗者であるコルネリウスの家でのことでした。このように、ペテロは御国の鍵を用いたのです。

これは、多くの人が誤って信じているように、ペンテコステに王国が確立されたことを意味するものではありません。単に、王国においてイエスと共に治める者たちの選別が始まったことを意味するに過ぎません。ペテロが用いた天の国の鍵とは、キリストとの共同相続人として、王国における統治の機会への鍵でした。王国におけるこの高い地位に至る道は困難なものです。パウロは、誰もが「多くの苦難」を経て初めて王国に入ることができると述べています。 使徒行伝 14:22

神によって王国のこの高貴な地位に召される者たちは、原則として、この世の偉大な者や力ある者、あるいは貴族たちではありません。もっとも、彼らに対して差別があるわけではありません。単に、彼らが現在置かれている名誉と権威のある立場においては、「狭い道」の代償があまりにも高すぎるように思えるだけなのです。
ヤコブはこう記しています。「神は、この世の貧しい者たち、すなわち信仰に富む者たちを選び、御自身を愛する者たちに約束された御国の相続人とされなかったでしょうか」（ヤコブ2:5）。しかし、この世の基準で富める者であれ貧しい者であれ、小さな者であれ大きな者であれ、
イエスは、御国に入るためには、すべての人が「幼子」のように、謙遜で、無垢で、子供のような者にならなければならないと教えられました。
「天の御国は、このような者たちのものである」と彼は言われました（マタイ18:3、マルコ10:14,15）。ここでイエスが言おうとしていたのは、御国が赤ん坊だけで構成されるということではありません。

洗礼者ヨハネ

イエスはこう言われました。「女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れていない。しかし、天の御国で最も小さい者でさえ、彼より偉大である。」（マタイ11:11）。もし天の御国に入ることが、伝統的な神学が教えるように、地獄の火から逃れる手段であるならば、このイエスの言

葉は実に奇妙なものとなるでしょう。
しかし、天の御国についてこれよりも優れた理解が与えられていることを神に感謝したい。ここでも、他の多くの例と同様に、イエスは「天の御国」という表現を用いて、やがてすべての国々を治め祝福することになる、約束されたその栄光ある統治の、霊的あるいは天的な段階を指し示している。そして、洗礼者ヨハネは、御国の天的な段階には関与しないのである。

「律法と預言者はヨハネまでであった」とイエスは言われた。「それ以来、神の国が宣べ伝えられている。」（ルカ16:16）。シナイ山で与えられた律法と、それに従うことへの報いに関連して、主はイスラエルの民にこう言われた。「もしあなたがたが、わたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、……あなたがたは、わたしにとって祭司の王国となり、聖なる国民となる。」」（出エジプト記19:5,6）。国民全体としては、この「祭司の王国」という約束された地位にふさわしいとはなりませんでした。しかし、
預言者やその他の忠実な者たちは、個人として、その資格を備えていました。実際、古代の族長たちは、書かれた律法の下にはなかったものの、律法が宣言した戒めに忠実であり、神は彼らに対する約束を必ず果たされるでしょう。

これらの「古の義人たち」は皆、メシアの王国に関する約束を信じていたからこそ、神に忠実に仕えた

のである。神は彼らに天上の希望を提示されたわけではない。彼らの期待は、地上において人間として復活することにあった。パウロは『ヘブライ人への手紙』第11章で彼らの多くを列挙し、義のために受けた苦難について語り、彼らが「より良い復活」を信じて耐え忍び、死んでいったと説明している。（ヘブル人への手紙 11:35,39-40）。その「より良い復活」とは、人間としての完全な状態への回復であり、民の間で教師や指導者としての地位に就くことである。

イエスは当時の人々にこう言われました。「あなたがたが、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてすべての預言者たち（預言者の最後であるバプテスマのヨハネを含む）が神の国にいるのを見て、自分たちがそこから追い出されるのを見るとき、そこには泣き叫びと歯ぎしりがあるでしょう。
また、東から、西から、北から、南から人々がやって来て、神の国に座るであろう。」マタイの記述によれば、彼らは「アブラハム、イサク、ヤコブ」と共に座るとされている。またマタイは、その「追い出される者たち」を「御国の子供たち」であると特定している。ルカ13:28,29；マタイ8:11,12

「御国の子ら」、すなわち律法への忠実さによって「祭司の王国」となる資格を得ることができた者たちは、死からよみがえったとき、
、自分たちがこの名誉ある地位を占めていないことを知って、大きな失望を覚えることになる。彼らの

失望は、「泣き叫び、歯ぎしりする」という表現で描かれている。
しかし、イエスは誰がその地位を占めるかを説明している。それは「アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてすべての預言者」という、古の義人たちである。人々は、当時すでに地上の事柄を統治しているメシアの王国の代表者として彼らを認めるという意味で、彼らのもとに行くことになる。

これらが、キリストの王国の地上的段階となる。詩篇45篇16節には、彼らが「全地の君たち」とされることが記されている。洗礼者ヨハネは、王国の天上の段階においてイエスと共にいることはないが、彼は、天の支配者であるキリスト、そしてキリストの自己犠牲の足跡に従って忠実に苦しみ、死んだ者たちを代表する、これらの地上の「君たち」の一人となるのである。

こうして、キリストの御国の組織体制は完成することになる。天と地の両方の段階におけるその人々は、あらかじめ試練を受け、訓練を積んでおり、死からよみがえらされ、その御国において統治者や教師としての地位に就くことになる。
イエスは死からよみがえった最初の人であり、現在の時代を通じて、ご自身の共同相続人たちの召命と訓練を監督してこられました。イエスは天の恵みの御座において、彼らの弁護人として仕えてこられました。イエスは彼らの良き羊飼い、助言者、そして

導き手であられました。イエスは彼らの主であり師、彼らの頭であられました。

共同相続人たちの召しと訓練の業が完了し、彼らの死からの復活と神性への高揚が成し遂げられた時、初めて彼らの人間の代表者である「君たち」の「より優れた復活」が訪れ、長く約束されてきた王国のこれら二つの段階が、調和と栄光のうちに共に機能し始めるのです。

また、その王国には霊的な「僕」たちからなる「大いなる群衆」が存在する。彼らは王座の「前」に立つのであり、王座に「座る」わけでも、王国の支配者となるわけでもない。聖書は彼らが具体的にどのように仕えるかについては明記していないが、どうやら王国の天的な側面と地上の側面との間の連絡役として機能するようだ。
この「大いなる群衆」については、黙示録7章9節、10節、13～17節に記述されています。

なんと完全で、完璧に組織された「王国」、すなわち政府となることでしょう！ミカ書4章1～4節では、それは象徴的に「主の家の山」として描かれています。
山は王国の象徴であり、家は神の統治する家族、すなわち統治する家系を表しています。この預言において、王国の二つの側面は、霊的な「シオン」と地上の「エルサレム」として象徴されています。預言は、「終わりの日」に「主の家の山が諸山の頂に確

立され、……人々がそこへ流れ込む」と述べています。

イザヤ書2章2節、3節に記された類似の預言には、次のようにあります。
「すべての国々がそこへ流れ込み、多くの民が来て言うであろう、『さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ上ろう。主は御自身の道を私たちに教え、私たちは主の道に従って歩むであろう』。なぜなら、シオン（キリストとその足跡に従う者たち）から、またエルサレム（古の義人たち）から、律法と主の言葉が （発せられる）からである。」

ミカ書4章3節は次のように続く。「主、すなわち偉大な王であり裁き主である『彼』は、多くの民の間で裁きを行い、遠く離れた強国を戒められる。」
このことから、キリストの王国が人間の事柄に対して強力な支配力を及ぼし、当初はその義なる統治にひざまずこうとしない強国を「懲らしめる」ことさえあることが、いかに明白であるか。このような預言を、神の王国とは単に個人の心の中にある義なる霊に過ぎないという誤った説と調和させることは不可能である。

預言者はさらに、キリストの王国の統治の下で主の道を学び、必要であればその過程で「懲らしめ」や訓練を受ける結果として、諸国は「剣を鋤に、槍を鎌に変える。国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶことはない。
しかし、彼らは皆、自分のぶどうの木の下やいちじ

くの木の下に座り、誰も彼らを恐れることはない。万軍の主がそう言われたからである。」ミカ書 4:4

王国の民

キリストの王国には、霊的な側面と地上の側面の両方があるという事実に加え、統治者と、統治される者、すなわち臣民の両方が存在します。聖書を学ぶ上で、この区別を認識しておくことは重要です。イエスが弟子たちに、彼らが御国で自分と共にいることを約束されたとき、それは王国の統治の側面、すなわち彼らが御国においてイエスと共に「王であり祭司」となることを指していました。
（黙示録5:10；黙示録20:4,6）。
十字架にかけられた強盗は、イエスに御国で自分を覚えていてほしいと願い、イエスは「まことに、今日あなたに告げる。あなたは私と共にパラダイスにいるだろう」と答えました。（多くの翻訳ではコンマの位置が誤っています）。（ルカ23:43）。これは、その強盗が御国の被支配者の一人になれるという約束でした。

ここでイエスが「パラダイス」という言葉を用いた理由は、その王国が全地球にわたりパラダイスの状態を回復させるからである。私たちの最初の両親は神の律法に背き、パラダイスから追放されたが、神の御心、すなわち律法は王国によって再確立され、パラダイスは回復される。全地球はエデンの園のようになり、回復され、完全な人間たちで満たされる

。彼らは王国の臣民となる。そして、なんと幸福な臣民となることか！

預言者イザヤは、再び「山」を王国の象徴として用い、この山において主が「死を勝利をもって滅ぼし、主なる神はすべての人の顔から涙をぬぐい去られる」と記しました。（イザヤ書25:6-9）。死んだ者たちは死から目覚めさせられ、王国の命を与える祝福を享受する機会を与えられる。このことは、死者の復活について記された素晴らしい章であるコリントの信徒への第一の手紙第15章において、使徒パウロによって確約されている。まず彼は、キリストと共に生き、支配する者たちの復活について述べ、彼らが不死へと高められ、栄光を受けると説明している。
さらに彼はこう言います。「そうすれば、『死は勝利に飲み込まれる（
）』と書かれている言葉が成就するのです。『死よ、お前の刺はどこにあるのか。墓よ、お前の勝利はどこにあるのか』」（コリントの信徒への手紙一15:54,55）

これは御国の働きに含まれるものです。パウロは、すべての敵が「キリストの足の下に置かれる」までキリストが統治し、「最後に滅ぼされる敵は死である」と説明しています（コリント人への第一の手紙15:25-
26）。この御国の栄光に満ちた働きに、イエスの弟子たちは与ることになります。なぜなら、これは私たちの本文にあるように、「いと高き方の聖徒たち

の民に与えられる」御国だからです。」（ダニエル書7:27）と記されている王国のことだからです。また、これは黙示録11章15節で預言された王国でもあり、そこには「この世の王国は、私たちの主とそのキリストの王国となった。主は、世々限りなく統治される」とあります。

この王国の準備には数千年の歳月が費やされますが、ついにその確立の時が到来すれば、神が約束されたすべてのことが成就します。王国の権威は、まず「国が立ってから今に至るまで、かつてなかったような大患難の時代」において世界に現れ、「この世の王国」を滅ぼします。（ダニエル12:1；マタイ24:3,21,22；黙示録2:26,27）。しかしそれ以上に、黙示録11:18が明らかにしているように、その設立は死者の復活の時を告げるものであり、この時代の「聖徒」たちが、王国の霊的な段階においてキリストと共に千年間統治するために高められ、また、昔の預言者たちが「全地の君主」とされる時となる。

その時、全世界が啓発され、大小を問わずすべての者が主を畏敬することを学ぶようになる。
この預言において「地を滅ぼす者」と描写されているように、故意に神と義に反対し続ける者たちは、自ら「民の中から滅ぼされる」ことになる。使徒行伝3:23

そうして、御国の業は完成し、天と地の創造主である神は、パウロが予告したように、「すべてにおい

てすべて」となられる。　（コリント人への手紙第一15:24-
28）。こうして、御国の働きを通じて、すべてのクリスチャンの祈り、「御国が来ますように。天におけるごとく、地にも御心が成りますように」（マタイによる福音書
6:10）が完全に成就されることになる。これまでに捧げられたどの祈りよりも、これほど完全で栄光に満ちた答えが与えられる祈りは、他にないだろう！